



翻案作品分析からみた「杜十娘」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育学部 公開日: 2016-08-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上原, 徳子, Uehara, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/5978">http://hdl.handle.net/10458/5978</a>

## 翻案作品分析からみた「杜十娘」

上原徳子

### A Study of How *Dushiniang* Is Written by an Analysis of an Adaptation Work

Noriko UEHARA

#### はじめに

『警世通言』巻32「杜十娘怒沈百宝箱」は、後に明末の短篇白話小説の選集『今古奇観』にも収録され、中国では高校の語文（日本の国語に相当する）教科書に教材として採用されるなど短篇白話小説の中では比較的広く知られた話である。この話については、中国・台湾では現在も多数の研究論文が続々と発表されている。近年は、後世に編まれた翻案作品や最近の映像化作品にまで目配りした論文<sup>1</sup>があり、さらに中国語論文にも日本の翻案作品を取り上げるものが見られるようになった<sup>2</sup>。「杜十娘怒沈百宝箱」は、ただ一篇の短篇白話小説に過ぎないが、その受容と研究は時代や国境を越えて広がっている。

日本では江戸時代に都賀庭鐘によって翻案されており、これまで国文学の専門家によって研究が行われてきた。本論は中国古典小説研究の立場から日本における「杜十娘怒沈百宝箱」の翻案作品に関する研究の中で「杜十娘（以下中国白話小説版をこのように表記する）」がどうとらえられてきたのかについて考察するのが目的である。

なお、都賀庭鐘の『繁野話』所収の翻案作品については、本論で取り上げた以外にも多くの論考がある。しかし、ここでは、論考の過程で「杜十娘」について言及していないものについては触れないこととする。

—

本論は、中国白話小説とその翻案作品の違いについてそれぞれの内容を詳しく分析し比較するのを目的としない。しかし、本論の趣旨からある程度の内容の把握は必要であると考え、簡単に「杜十娘」の梗概を述べる。

妓女杜十娘は、北京の名妓として知られていたが、科挙受験のために国子監の学生として上京した浙江出身の若者李甲と親しい間柄となる。やがて李甲の資金は尽きたが、杜十娘は妓館

のおかみに自身の身請けの金を300両用意できれば落籍させてやってもいいという約束をとりつける。李甲は金策に奔走するものの成果はなく、結局杜十娘自身の蓄えと友人柳遇春の助けにより無事身請けすることが出来た。その後二人はともに李甲の故郷に帰ることになる。だがその途中瓜州の渡し場で李甲は商人孫富の口車に乗り、杜十娘を金で孫富に譲ってしまう。そのことを知った杜十娘は、多くの観衆が見ている中で、自分の蓄えた宝石を江に投げ捨て、男たちの不実を訴え、身投げしてしまったのだった。

## 二

翻案作品「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈む話」については、徳田武氏による『繁野話』解説<sup>3</sup>によって確認しておきたい。都賀庭鐘は序文で「杜十娘を翻して」とのべており、その内容も原作をほぼそのまま日本の話として置き換えている。なお、「江口（以下翻案作品をこのように表記する）」について述べる他の論考の見解もこれと違ったところはない。さらに、この解説をはじめ、諸研究では庭鐘は白話小説「杜十娘」がもとづいたとされる文言小説（『情史』所収）も見ていたと共通に認識されている。

「江口」では、杜十娘は白妙、李甲は小太郎、柳遇春は岸惣官成双、孫富は柴江酒部輔原繩とされる。しかし、後半一カ所だけ原作と異なる設定があるという。以下徳田氏の解説からその部分を示したい。

粉本では、孫富は李甲から杜十娘を横取りしようと、李甲に妓女を家に連れ帰ることに危険さを勧告するが、翻案では、孫富に当る海賊柴江酒部輔のほか、小太郎の親族で「堅固の田舎人」である和多然重を別に登場させ、原話には該当する人物のない、この和多然重が、柴江に欺かれて、小太郎に妓女を伴い帰る危険性を忠告するのである。<sup>4</sup>

徳田氏は、上記部分に続いて「原話のお為めごかしの勧告が、翻案では真剣な忠告に反転させられており、家門の継承を妓女への愛情よりも重要視するという、儒者庭鐘の「子弟の戒」（序）として意味づけられたものになっている」と両者の違いについて分析している。

以上の徳田氏の見解は、研究者のほぼ共通の理解であるとみられる。次に、これらをふまえて個々の論の中にみられる「杜十娘」分析の内容について検討していきたい。

## 三

「杜十娘」について、徳田武氏は一貫して現代中国で高く評価されている作品だと述べる。以下一例を挙げる。

「杜十娘」が訴えているものは、勿論、娼妓の純粋な愛情への賞賛と、女を裏切った優柔不断な男への非難であって、それは、俗講に根ざして成立した中国白話小説の民衆性を濃厚に反映したものであり、それ故現代中国において高く評価されているのである。<sup>5</sup>

徳田氏はまた「杜十娘」は「杜十娘の献身的な愛情を賞讃し、哀惜している<sup>6</sup>」とも述べる。

「杜十娘」は「女性の愛情をテーマとする構成<sup>7</sup>」であり、李甲が杜十娘の死後心を病んだのは「慚愧のあまり狂人になってしまうからこそ、愛情を裏切ることの重みが鮮明に伝えられる<sup>8</sup>」のだという。

さらに、両者の唯一の大きな相違点である、孫富が李甲に杜十娘を自分に譲り渡すよう仕向ける場面については、「ここで問題になるのは、孫富の発言はおためごかしであるだけに、その腹黒い真意を洞察出来ぬ者には、誠実味のある発言に聞えることである<sup>9</sup>」と指摘し、庭鐘はその言語の二面性を利用してこの発言を真実の忠告に転化しているとしている。

徳田氏によると、この部分が都賀庭鐘の翻案で創作といえる部分だとされている。「江口」で小太郎になされた忠告は「孫富の虚偽の忠告と表面的な語句を同じくしていることは、容易に指摘できることである」が、「女色を戒め、家門の継承を重視する」母方の一族からの心からの忠告、すなわち「善意の言葉に反転」させているのだという。そして、この忠告により小太郎はきっぱり改心する。孫富の発言のうち、表面的には善意の忠告のようにみえる側面が切り取られ、それが「杜十娘」には登場しない親戚からの心からの忠告とされているという分析である。

これらの改変は、徳田氏によれば「以て読者子弟を戒めようという、庭鐘の教訓意識に支えられ」ているという。さらに、庭鐘の教訓意識は「杜十娘」には全く見られず、「妓女との愛情を全うする」「個人的モラル」より「儒家的名分論」のほうが重いと考えていた<sup>10</sup>としている。ここから徳田氏の「杜十娘」への見解を整理すると次のようにまとめられないだろうか。

「杜十娘」は、若い士大夫階級の男と妓女とが個人的愛情を全うしようとする物語であり、儒教的な戒めの側面はみられない。それらは、民衆性に根ざす白話文学の特性からもたらされたものである。

これは徳田氏が解説で「杜十娘」の主題を「侠妓の偏性と不実な男への指弾」であり、中国白話小説は「下層階級の者や弱者に同情の眼を向けて知識人を揶揄嘲笑する傾向を備え<sup>11</sup>」ているとする主張に沿ったものだとはいえるだろう。

#### 四

及川茜氏は、中国文学日本文学研究双方に目を配り、それまでの「杜十娘」研究を振り返った上で、詳細に「杜十娘」を分析する。及川氏は『『繁野話』における〈三言〉の受容<sup>12</sup>』において、「杜十娘」について文言小説から白話小説への改編、さらに日本での翻案作品にまで網羅的に言及している。及川氏は文言小説「負情儂傳」から『情史』「杜十娘」を経て白話小説「杜十娘」に至る改編について以下のように述べる。

科挙など意に介さず夫婦二人の生活を願う杜十娘の姿からは、社会に対するアイロニーが窺われると同時に、「負情儂傳」の筋にそのまま従い、彼女に幸福な結末を用意しなかった点には無意識の文人的心理の反映もみられる。馮夢龍の改編態度には、こうしたせめぎあいが存在しているのである。

これは、妓女の行動が文人的価値観の実現と反しなければ妓女の物語中の運命は比較的穏や

かに処理されるという先行研究に言及し、同じ『警世通言』にも幸せな結末に至る妓女の物語が存在していることについて述べた後の部分である。さらに、及川氏は、馮夢龍自身がなかなか官途に就くことが出来ず、文人的価値観に従った官僚という目標に疑問を抱いていたと推測しており、ここには改編をした馮夢龍の心情が反映されているということになる。

また、杜十娘は「社会を支配する金銭原理を武器にしたものの、まさにその金銭原理によって情人に裏切られることになった」ため命を落とし、この物語は「貨幣経済社会への批判としても、そして社会から疎外された遊女がもっとも真心に富んでいるという点での、文人的価値観によって構成される社会への批判としても、痛烈なものである」とも述べる。物語が「文人的価値観と金銭原理の結びついた社会に対する批判」を含有するにも関わらず、杜十娘が「財宝を李甲の両親に献じることで許しを得ようという打算」があり、この「金銭的原理を逆手に取って自由を手にする」態度は、「アイロニカルな意味を有する」という。

## 五

顔景義氏は、「中国「三言」の初期読本『繁野話』への影響—主に「杜十娘」と「江口」の主題の相違点を再考—<sup>13</sup>」において、「中国人の立場から」関連性を再考し、主題についても分析を試みると述べている。

顔氏の論旨は論文の結びの部分によく表れている。

「杜十娘」の現実性と「江口」の非現実性、「杜十娘」の非教訓性と「江口」の教訓性の主題には、それぞれの文化的な諸因があるのである。「杜十娘」は「三言」の中の名作で、資本主義発生期の社会現実を反映している。筋立て、人物構造、歴史背景などの面で現実性と非教訓性の主題に満ちている。<sup>14</sup>

現実性について、顔氏は「杜十娘」冒頭部分や妓女の命名法など複数の場面を取り上げて検討している。さらにその主題については、「馮夢龍は杜十娘の悲劇を通して、封建礼教や封建道徳への批判を明示している<sup>15</sup>」ので非教訓的であるという。さらに李甲に関する後日譚については次のように述べる。「封建礼教を重要視している父親の叱責を恐れたのは李甲の十娘を転売する原因でもあるので、李甲の悪報の結末により、作者の人を殺す封建礼教への批判がよく表れている。<sup>16</sup>」そして、庭鐘は「現実的な世界を教化的な理想世界に改変していることが明白」とであると述べている。

## 六

ここで、ここまでみてきた翻案作品「江口」の分析中に現れた「杜十娘」分析について検討していきたい。

まず、徳田氏が述べるように、「杜十娘」が現代中国で高く評価されていることについては異論が無い。ただし、その評価の中身について、純粋な愛情やその民衆性のみが強調されている印象がある。「杜十娘」については、中国において顔氏が述べているような「資本主義発生期の社会現実を反映」するリアリズムを体現していることへの評価、また反封建的な作品としての

政治的な評価も見落としてはならない。しかしながら、日本の翻案作品との比較を行うとき、必ずしも現代の政治体制から派生するこれらの評価を反映する必要はないだろう。とはいえ、これまでの日本における「杜十娘」研究を振り返ったとき、中国の政治的・思想的バイアスがかかった研究に引きずられる面が全くなかったとはいえない。研究者は中国の研究を参照する際、この点に注意が必要であろう。この問題は、改めて古典小説に対する現代人の持つ様々なバイアスを取り払った分析、また対象が創作或いは享受された時代に立ち返って分析する必要性を示唆している。

ただし、「杜十娘」については従来の妓女の純粋な愛情を描いたという点からの高い評価だけでなく、ジェンダー研究の視点から分析する<sup>17</sup>など、2、30年前とは違った切り口での研究もなされており、「杜十娘」が政治的な意味合いから取り上げられるだけの作品ではなくなってきていることも述べておかなければならない<sup>18</sup>。また、杜十娘の悲劇と金銭原理との関係についての指摘もあった。中国でも数多くの論考がなされており、その多くは金銭原理を悲劇の原因としている。だが、妓女と金銭は切っても切れないものであり、さらに、それが「杜十娘」の本質の問題であるとはいにくい。

さて、「杜十娘」研究に新たな視点を持ち込める見方はあったのだろうか。そういえるのは、徳田氏の指摘する都賀庭鐘が行った孫富が李甲を言いくるめる場面の改編についての部分であろう。それは、孫富の言葉が持つ二つの側面への着目である。すなわち孫富の発言は、表面的には李甲を思いやるような言葉であるのに、その実杜十娘を我が物にするための言動であることに着目するということである。李甲が杜十娘を売り渡してしまう理由を彼自身の弱さだけでなく孫富の言葉から詳細に分析すれば、杜十娘の純粋な愛情を裏切ったとして李甲が一方向的に非難されるのではなく、より丁寧に李甲の心理的動きを考察することができるだろう。また孫富の言葉がもつ二面性は彼の持つ言葉の根拠や説得力にも影響する。孫富が商人であることから、明末の社会背景にまで考察が至るかもしれない。親戚からの忠告という点からつけ加えると、「杜十娘」には、李甲を説得する人物は登場しないが、1981年の映画版<sup>19</sup>には北京から故郷への道すがら李甲に接触する使用人が登場する。あるいは、父親自身が現れ杜十娘に直接別れを促す形になっている映画<sup>20</sup>もある。これは、都賀庭鐘が改変を加えたように、元来孫富が李甲を籠絡する場面に現代人である映画制作者が何らかの不足を感じた結果とも考えられるだろう。これら李甲の家に属する人間の登場は、彼に儒教規範を強く想起させ、後の杜十娘転売への伏線となる。

また「杜十娘」が非教訓的であるという主張については、慎重にならざるを得ない。「教訓」が儒教的戒めという意味だけで使われるのであればその通りである。一方で「純粋な愛情」の素晴らしさを人々に教化する目的があったともいえるだろう<sup>21</sup>。また、「杜十娘」は白話小説とはいえ言語がかなり文言寄りであり、もとになった文言小説もわかっている。白話小説はその来源がまちまちで、全てに「民衆性」を見いだせるかは詳細な検討が必要である。明末は短篇白話小説集の量産のため、文言小説をほぼそのまま白話にして出版されたと考えられるという研究<sup>22</sup>もある。明末の白話短篇小説の多様な背景に注意を払わなくてはならない。

## おわりに

ここまで、日本の翻案作品分析の中で述べられた「杜十娘」に関する部分を取り上げ検討し

てきた。

結果として、従来白話小説研究で行われてきた分析と大幅に異なるものは無かったが、「杜十娘」と都賀庭鐘の「江口」との大きな違いである、李甲に杜十娘転売を決意させるくだりの分析から、孫富の言葉の持つ二面性が浮かび上がった。これは、今後「杜十娘」研究で詳細に検討できる新たな切り口となるだろう。

さらに、明の短篇白話小説の庶民性に言及する際は、それぞれの来源にまで細心の注意をはらわなくてはならないことも指摘できた。

なお、韓国にも「杜十娘」の研究論文があり、韓国及び日本での伝播に関する論考もみられるが、現時点で内容の分析にまで至っていない。それらについては今後の課題としたい。

## 注

<sup>1</sup> 王晶「杜十娘故事的传播研究」揚州大学修士論文、2008年

<sup>2</sup> たとえば 陳婧〈都賀庭鐘初期读本对《三言》情节创作的借鉴—以《英草纸》和《繁野话》为中心〉《才知》2013年03期 など。

<sup>3</sup> 新日本文学体系80『繁野話 曲亭伝奇花釵兒 催馬楽奇談 鳥辺山調絃』岩波書店 1992年、解説は524-526頁

<sup>4</sup> 前掲書（注3） 524頁

<sup>5</sup> 徳田武『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店 1988年、202頁

<sup>6</sup> 前掲書（注5） 204頁

<sup>7</sup> 前掲書（注5） 205頁

<sup>8</sup> 前掲書（注5） 204頁

<sup>9</sup> 前掲書（注5） 200頁

<sup>10</sup> 前掲書（注5） 203頁

<sup>11</sup> 前掲書（注3） 525頁

<sup>12</sup> 『中国言語文化論叢』10巻 東京外国語大学中国言語文化研究会 2008年、1-26頁

<sup>13</sup> 横山邦治先生叙勲ならびに喜寿記念論文集編集委員会編『日本のことばと文化：日本と中国の日本文化研究の接点：横山邦治先生叙勲ならびに喜寿記念論文集』溪水社 2009年、46-59頁

<sup>14</sup> 前掲書（注13） 57頁

<sup>15</sup> 前掲書（注13） 54頁

<sup>16</sup> 前掲書（注13） 56頁

<sup>17</sup> たとえば 張俊〈被遮蔽の杜十娘—对《杜十娘怒沉百宝箱》的女性主义解读〉重庆师院学报（哲学社会科学版）、2002年02期 など。

<sup>18</sup> さらに補足すれば、語文の教材であることから、教科教育の立場からの研究も数多くなされている。

<sup>19</sup> 周予監督 潘虹主演《杜十娘》1981年公開

<sup>20</sup> 杜国威監督 李嘉欣主演《Miss杜十娘》2003年公開

<sup>21</sup> 大木康「馮夢龍『三言』の編纂意図について—‘真情’より見た一側面—」『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』1986年、627-647頁

<sup>22</sup> 川島優子「明代の白話小説と『夷堅志』」伊原弘・静永健編『南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』勉誠出版2015年、199-213頁・大賀晶子「文言文で書かれた嘉靖萬曆期の短篇白話小説について」『和漢語文研究』第5号、京都府立大学国中文学会 2007年、50-71頁

(2016年10月17日受理)